

---

# パニックトリップ!

雲霧 袖留

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

パニックトリップ！

### 【Nコード】

N4971L

### 【作者名】

雲霧 袖留

### 【あらすじ】

怪しげなサイトに入っちゃって、気づいたらリボーンの初代守護者たちに愛されちゃってトリップ!? しかも先代たちが元の世界に戻るための扉を壊して……

うちら仲良し4人！（前書き）

また連載増やしちゃうよ ロクに進んでないけど

方便とか使いたかった・・・それだけ！

## うちら仲良し4人！

### 一ノ瀬桜いちのせ 桜

ちよっぴりキツめの大坂女子。

柔道だけは誰にも負けない。

好きなキャラは骸。頭は結構良いほう。

そしてツッコミが人一倍凄い。意地悪な女の子にトラウマあり。

愛称は「サクラ」

茶化されたときのあだ名は「さくあーろ」

### 朔上蜜柑さくじょう みかん

おっとりめの沖縄少女。

幽霊が見える触れる話せる三重苦。空手が得意で黒帯。

トンファー使い。シークワーサージュースが大好物。

好きなキャラはツナ&ジヨット。

超がつくほどの天然。それが萌えるらしい。

蛇（特にハブ）にトラウマあり。

愛称は「ミカン」

茶化されたときのあだ名は「みかんでーら」

### 三上夏みかみ なつ

元気が一番！なキュートな長崎少女。

剣道が得意で夏目の妹。

夏目のピアンキ風。パスタを食べてからトラウマで姉を見ると気絶。

好きなキャラは獄寺。

ちよっと非行少女でピアスを2個あけている。

しかし方耳のピアス穴は、昔男子に引つ張られて皮膚がちぎれ、使  
い物にならない。

男子にトラウマあり。

愛称は「ナツ」

茶化されたときのあだ名は「なつな」

みかみ なつめ  
三上夏目

おしとやかなヤマトナデシコ長崎少女。

夏の姉。無謀っぷりが玉にキズ。

好物はお寿司。好きなキャラは山本。

野球少女でも有名。(らしい)

いつも刀&amp;バットをフルスイング!

茨にトラウマあり。ナツに近寄るときは要メガネ。(伊達メガネ)

愛称は「ナツメ」

茶化されたときのあだ名は「なつめまーもん」

うちら仲良し4人！（後書き）

・・・よし。頑張ろう。

## 序章やで！（前書き）

オルゴールを作業用BGMにすると、いい案が湧くのは私だけ？

## 序章やで！

学校

「はっさいーい！（おはよう）」

「何や、ミカンかあ。脅かさへんでや・・・びっくりするやろ？」

「ごめんごめん、脅かすつもりはなかったさあ。」

「そっか、それならええねん。」

「おはよう。サクラ、ミカン。」

「チャおっす」

「はっさいーい！」

「おっはよー！」

「そういえば、リボーンの新刊でたけど、読まないさ？」

「ミカン！そういうことは早く言ってよ！／言えよ！」

数十分後

「やっぱし、骸はんはカツコええ！スピードもごっついイケメンやし！」

「いや、ツナさあ！ジヨットもカツコいいさあ！」

「いやいや、山本でしょー？雨月もなかなかイケメンなのよねー！和風って素晴らしい・・・！！！」

「いやいやいや、獄寺だろー？Gもカツコよくて最高だしな！な、

アネー・・・」

「あら？」（ナツメ、メガネ無し）

「ふげーっ！」

「大変さあ！ナツが倒れたあ！！」  
「ナツメ！メガネはずしたらあかんやん！メガネつけて！メガネ！」  
「あつ、なんか目が涼しいと思おとつたらメガネがないわ」

（メガネ着用）

「どうしようかな・・・ナツ起きないよ・・・」  
「うちが保健室までえ連れて行くよつてにき、2人つてもなんかしてて！」

「ビアンキ風パスタのトラウマすげえ・・・ナツ起きないさ・・・」

そして、ナツを保健室へ連れて行ったあと、教科と言つ名の昼寝を終わらせて

みんなそろつて部活動に。

（剣道部と柔道部と空手部は一緒の武道館でやるので）

「じゃあ、私サクラと行くからさあ。」

「ナツうー！剣道がんばつてな！やあ、ほな後で校門前やで！」

「分かった、また後でねー。」

「分かった、ミカン。あ、リボン新刊忘れんなよ。いくぞ、野球馬鹿姉貴！」

「ちよつと！セーラー服引つ張らないで！リボンほどけるつて！首絞まるつて！あと、野球馬鹿は小学生のときのあだ名だけん！」

「うるせーぞ、姉貴。あと今でも山本並に投げられるだろ」

「確かに。今もつてきどき早朝にバッティングセンター寄つてるやろ？知つてるわや。」

「え？ばれとつたか・・・」

キーンコーンカーンコーン

「エライ！顧問の先生全員めっちゃ厳しいよってに怒られるじゃろ！はよ行かへんって！」

パタパタ・・・

「遅いぞ！一ノ瀬！朔上！三上！」

「すみません」

「すみません」

「・・・」

「すみません・・・ほらナツも謝る！」

「・・・」

「本当にすみません・・・あとでこっぴどしほりますんで・・・

（黒笑）

「始めるぞ！」

あたりに熱気がこもる。

数十分後、柔道部と空手部は先に帰ってしまった。

剣道着を脱ぎ、メガネをかけたつ、ナツメは言った。

「あら、先に帰ったのね・・・早く行かんと・・・」

「いつつ・・・姉貴、加減ば覚えてくれ・・・」

ナツはナツメと一緒に訓練していた。

(顔が隠れるのでメガネ無しでもいい)

2人は荷物を背負い、校門に走った。

序章やで！（後書き）

こんな4人です。

方便マジで思い切り使います。トリップで少しは直りますが・・・

## 2話目とよみ (前書き)

本屋でCD売ってるのって全然不思議じゃないよね。

## 2 話目とよ

校門

「ごめん、ごめん遅れたね」

「ほんまやで！ まあ、許しちやるけど！」

「なあナツメ、リポーンもって来よつた？（もって来た？）」

「うん、ここにあるよ。ついでんかい本屋寄らねーらん？（寄らな  
い）」

「賛成！」

本屋前の道路

「リポーンで好きな編ってなんや？ウチは黒曜編んちゃう？骸はん  
がもつかっこよつて・・・」

「いやいやいや、初代編さあ！」

「私の場合、未来編かな・・・獄寺がカツコいいからな・・・」

「VSヴァリアー編を好いとつ」

本屋に入ろうとしたら、いつもの本屋のお姉さんが、声をかけた。

「あら、ミカンちゃん達じゃない。頼んだ奴来たわよ？」

「え！ホンマに！？」

「嘘言っわけないじゃない。」

お姉さんがそういうと、ミカンたちはウキウキしながら店に入った。

「ほら、お金は先に貰ってあるからね？」

がさがさ、と少し大きな音を立てながら、

お姉さんは段ボール箱からCDを取り出す。

「最高や！キャラソングット！」「クフフのフ」と「消えない願い！」

「私も「護るべきもの」と「ひとつだけ」ゲット！」

「最高だな、」・・・loop」と「走れ」と「俺たちの約束」！」

「うふふー帰りながら聞こうつと！」「明日に向かって」と「みんな好きだぜっ」と「俺たちの約束」！」

「あ、新しい奴もあるけど・・・（テンションに若干引いてる）」

「コレって、正一のキャラソンとちゃうのん？」

「白蘭のもあるさ」

「おっ、ガンマとユニのものもあるな」

「うふふースクアールとベルの購入しちゃうわあ」

通学かばんにこっそり入れたCDプレイヤーで、キャラソンのCDを聴きながら。

4人は仲良く歩いた。

「公園で一休みしようよ、疲れた・・・」

「そうさね、私にもりたさあ（疲れた）。」

「そうだな、私も疲れたしな」

「なんかジュース買って来るから、すいとるの言って」

「じゃあ、ココア」

「オレンジジュース」

「・・・カフェオレ」

「私はエスプレッソ。買ってくるからここで待ってて。」

カパッ

カンをあけた音が響く無人の公園。  
さっきまで子供の声が出ていたが、帰ったのだろうか？

「なあなあ、これ見てや！ごっついで！」

ケータイを見ていたサクラが開いていたサイトは、

「貴方もトリップして恋をしましょう」

という名前の、たぶん夢小説サイトだった。

## 2 話目とよ (後書き)

こんなサイト、あればいいのにな。

3話目だ(前書き)

肩痛い・・・

### 3 話目だ

「夢小説かなあ？えらいごっついなあ」

「アレ？複数OKだって、なにになに・・・」「恋に落ちるかは貴方しだい！？」「楽しそうさね！？」

「とにかくやってみようぜ」

「そうよ」

「まずは名前やて・・・一ノ瀬桜、朔上蜜柑、三上夏、三上夏目・・・と。」

「好きなキャラクター・・・骸、ツナ、獄寺、山本・・・」

「好きな武器・・・三叉槍、トンファー、刀」

「誕生日・・・6月29日、10月10日、9月18日、5月10

日

「最後に行きたい世界・・・リボーンの世界。」

「なんか出てきた・・・規約？」

### 規約

貴方たちがトリップする前に、やることがあります。

もし、その世界で死ぬような事があっても、私たちは責任を負いません。

それに、恋に落ちなくてもです。それに、原作を崩さないよう、注意をしてください。トリップしたことは、キャラクターに言ってもかまいません。あなたたちの私物は、その世界に持っていきます。しかしケータイなどはあなたたちの履歴しか残しません。

もとの世界に連絡は取れません。お分かりですね？  
そして、トリップするまえに、キャラの先祖に会っていただきましょう。

来孫にふさわしいか・・・見極めていただければトリップ成功です。さあ、これくらいにしましょう。

(注意)好きなキャラクターの先祖に愛されれば、恋に落ちる確立が高いですよ。

最後ですし、貴方たちのためにこの詩をおくりましょうかね。

誰かに愛されるということは、誰かを愛するための近道である。

愛というものはとても複雑で、繊細なものなのだ。

世界で誰よりも愛されるなんて、すばらしいことではないだろうか。

恋は、愛の旅の乗車券に過ぎないのかもしれない・・・

・・・貴方たちの恋の旅に、幸あらんことを願っております。

b y 管理人より

そこで、みんなの意識が途切れた。

## サクラ、スピードに会う(前書き)

初代守護者の口調違つかもね。ミ―は来孫派なんで、初代はあんまり知らないんで・・・

## サクラ、スピードに会う

日の光の眩しさに、サクラは目が覚めた。

「ん……あれは……夢……ちやうか。」

辺りを見回すと、居た公園とは違う風景。それにミカンたちも居ない。

でも、目の前に、一人誰かが立っていた。

「ここ、骸はんの精神世界に似てるやん……あ、あの入って、まさか……す、スピード!? ……何で!？」

ギユウッ

「へっ!？」

スピードに抱きしめられて、サクラは混乱する。

「会いたかった・・・」

「えっ・・・？」

「待っていたよ、ずっと、ずっと・・・」

「誰かと間違えてるんとちゃうの？私はスピードにあったことないんやけど・・・」

「それは忘れているだけ・・・君なら来孫に会わせてもいいかな」

ギイイイイ・・・

混乱して忘れていたが、スピードの後ろに大きな扉があり、大きな音を立て、扉が開いた。

トント

痛くないほどの強さで、押された。体がグラッと動いて、扉のほうに倒れる。

サクラは、扉の向こうの空間に、吸い込まれて行ってしまった。

そして、また大きな音を立てて、扉が閉まった。

「・・・」

シュルシュルッ

長い蓮の花が、扉を完全に包んでしまった。

続く

サクラ、スピードに会う(後書き)

うん、言われなくてもわかってる。短いね。  
次はミカン飛ばしてナツ！

ナツ、ジーに会う

赤い空間。

「う……ここは何処だ……？姉貴は居ないだろうな……」

「……ナツ」

「へ……？」

誰かが呼んだ気がして、振り返ると。

「……ジー……？何でこんなところに……？」

ギョ……

「会いたかったぜ……」

「……えっ……」

「また……行っちまうんだな……行け。でも帰ってこいよ。」

トンッ

優しく背中を押されて、よろけて開いた扉の中に吸い込まれた。

そして、扉は閉まった。

「・・・」

ドゥンッドゥンッ

銃で、扉を打ち抜いた。

続く

## ナツメ、雨月に会う

和風な空間に、ナツメはいた。

「ここは何処かしら・・・?」

「・・・ナツメ!」

「う、雨月!?なんで・・・どっして?」

おぼろげ・・・

「・・・ナツメ・・・会いたかった・・・」

「・・・どっして・・・」

何も言わず、ナツメの背中を優しく、少しだけ強く、トンッと押し  
た。

お約束のごとく、ナツメは扉の中に吸い込まれる。

「・・・」

雨月はそっと、笛を吹いた。

すると、音符が一つの帯となり、扉に巻きついた。  
そして扉が、完全に包まれた。

続く

## ミカン、ジョットに会う

黒い、ただ闇があるだけの空間に、ミカンはいた。

「ここは何処さあ……？暗くて何も見えないさ……」

「ミカン」

「ジョット……？」

きゅじょう

「会いたかった……愛しいミカン……」

「私を……？どうしてさ……？」

「いつか分かる……そのときまで私を忘れるな」

「忘れるわけ……ないさ……」

「それでいい……X世に会って来い」

トン

背中を軽く押されて、扉に吸い込まれていった。

「・・・」

ピキ・・・パキピキ・・・

扉を零地点突破で凍らせた。

「お前たちを・・・ずっと待っていた・・・」

続く。

トリップ成功のようですわ

扉に吸い込まれた4人。

「ミカン！」

「サクラ！」

「姉貴！」

「ナツ！」

開けた空色の空間で、4人は再会した。

「私、ジヨットに会ったんさー！」

「私はスピードに会ったんや！」

「私はジーに会ったんだ……」

「私は雨月に……」

「あんな、ちょっと、規約に書いてやったとちやう？」「先祖に気に

入られればトリップ成功」って」

「じゃあ、4人つてもトリップ成功さ？」

「じゃねえの？」

「ああ、あつちに光が見えるよ？」

「手をつないで行こう、迷ったりしちや駄目だよ」

ぎゅっと手をつないで、光に目がくらみながら歩いていく。

目覚めると・・・居た公園には無かったはずの、芝生の上にサクラ  
たちは居る。

「トリップ・・・したのかな・・・？」

「うう・・・。サクラ・・・あがっさ）痛いさ（・・・ていー）手（  
離してくれねーらんさ？）（くれない？）」

「あ、かんにん。」

みんな、しっかりと手を繋いでいる。

そばには、通学かばんが置いてあった。もちろん、ナツメの真剣も  
だ。

「その辺回ってみたらどうやる？ほんまにトリップしてたら並中に  
行けるかもしれへんし・・・。」

「賛成」

みななどでとことこそその辺を歩いてみる。まだ昼のようすで、照りつけ  
る日差しが少し痛い。

並中校門前

「んー本当に並中に来た見たいさね。」

「お前ら」

「だいたっ!?! (誰だっ)」

「り、リボーン!?! 何やでえこないなト」に!?!」

「何で俺の名前を知ってる、答えねーと……」

チャキツと銃を構えられる。

ガスッ

反射的に、リボーンの銃を回し蹴りで、弾き飛ばした。

「あ。やばい、反射的にやってもうた……」

「お前、只者じゃないな、どこのマフィアだ」

「マフィア？そんなもんとちゃう。普通の女子中学生や、文句あるか？」

グシッ

「やめんさい、サクラ」

「そうさよ！怪しまれちよるわー！」

「姉貴、たまにはいい」

「ふげーっ！」

「ナツつう！！！」

「大丈夫や、これがあるからなあ」

「獄寺のキャラソン」

「ミカン、イヤホンあるか？」

「あ、あるわ、あるわあ」

耳元で聞かせる

「復活。ねえ姉貴、もう私の前でめがねはずすの禁止ね」

「ええ〜？」

「お前たち、何者だ？」

「異世界から来た、中学生さ」

「異世界？そんなの信じられるわけ・・・」

「ミカン、あれ出して欲しいんだけど」

「あ、あれさあ？規約にも書いてあったけど・・・」

「いいわよ。」

さっと、リボーンの単行本を出して、リボーンに見せた。

続  
く

ふげー！（卒倒）

（あれ、出して大丈夫なんさー!?）

（だいじょーぶや。あれ1巻で、日常編の最初らへんやからな。）

「・・・」

「それは嘘じゃないさ」

「私たちは未来も知ってる。」

「何がいつ起きるのかも、なぜ起きるのかも」

「私はツナの家系を知ってるさ」

「私はボンゴレの歴代ボスを知ってる」

「私はボンゴレリングのことを知ってる」

「私はアルコバレーノのことを知ってますわ」

「お前たちの言うことは本当らしいな、ついてこい」

何が起きるかなんてわからない。この世界で何を知るかも。

私たちに出来るのは、ただ原作を変えないで、この世界に居ることだけ。

## ふげー！（卒倒（後書き））

この話終わった後ちよつとパニックトリップ凍結します。

え？無責任？はいそうです。

正直言つて、複数は難しいのです。

18も連載作つた私も私ですが、方便+複数はちよつと・・・

もう少し完結したのが増えるまで、パニックトリップ凍結します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4971/>

---

パニックトリップ！

2011年10月7日03時42分発行